

Hibワクチンの接種を受けられる方へ

～ 予防接種に欠かせない情報です。予防接種を受ける前に必ずお読みください。～

1. 乳幼児の細菌性髄膜炎とHib(インフルエンザ菌b型)

- (1) 体の中で最も大切な部分ともいえる脳や脊髄を包んでいる膜を髄膜といい、この髄膜に細菌やウイルスが感染して炎症が起こる病気が髄膜炎です。髄膜炎には、細菌が原因の「細菌性髄膜炎」と、細菌以外(ウイルスなど)が原因の「無菌性髄膜炎」がありますが、治療後の経過が悪く後遺症が残るなどのため特に問題となるのが「細菌性髄膜炎」です。
細菌性髄膜炎の初期症状は、発熱や嘔吐、不機嫌、けいれんなどで、風邪などの他の病気の症状と似ているため、早期に診断することはとても難しい病気です。
- (2) 乳幼児の細菌性髄膜炎を起こす細菌はいくつかありますが、原因の半分以上を占めているのが「インフルエンザ菌b型」という細菌で、略して「Hib(ヒブ)」と呼ばれています。Hibは冬に流行するインフルエンザ(流行性感冒)の原因である「インフルエンザウイルス」とは全く別のものです。また、他の多くの細菌やウイルスとは異なり、Hibは乳幼児に感染しても抗体(免疫)ができず、繰り返し感染することがあります。
- (3) Hibによる細菌性髄膜炎(Hib髄膜炎)は、5歳未満の乳幼児がかかりやすく、特に生後3か月から2歳になるまではかかりやすいので注意が必要です。日本の年間患者数は少なくとも600人と報告されており、5歳になるまでに5歳未満人口10万対7.1～8.3人の乳幼児がHib髄膜炎にかかっていることになります。
- (4) Hib髄膜炎にかかると1か月程度の入院と抗生物質による治療が必要となりますが、治療を受けても約5%(年間約30人)の乳幼児が死亡し、約25%(年間約150人)に発育障害(知能障害など)や聴力障害、てんかんなどの後遺症が残ります。さらに最近では抗生物質の効かない菌(耐性菌)も増えてきており、治療が困難になってきています。
- (5) その他にもHibは、肺炎、喉頭蓋炎、敗血症などの重篤な全身感染症を引き起こします。

2. Hibによる感染症を予防するHibワクチン

このワクチンは、製造の初期段階に、ウシの成分(フランス産ウシの肝臓および肺由来成分、ヨーロッパ産ウシの乳由来成分、米国産ウシの血液および心臓由来成分)が使用されていますが、その後の精製工程を経て、製品化されています。また、このワクチンはすでに世界100ヵ国以上で使用されており、発売開始からの14年間に約1億5000万回接種されていますが、このワクチンの接種が原因でTSE(伝達性海綿状脳症)にかかったという報告は1例もありません。したがって、理論上のリスクは否定できないものの、このワクチンを接種された人が、TSEにかかる危険性はきわめて低いと考えられています。

3. Hibワクチン予防接種の受け方

Hibワクチンでしっかりと免疫をつくるため、次のような方法で接種を受けてください。

- (1) 対象者 生後2か月から5歳に至るまで(5歳の誕生日の前日まで)の間にある方
(生後2か月から7か月に至るまでの接種開始が望ましいとされています。)
- (2) 接種回数および接種間隔(接種開始年齢によって、接種回数が異なります。)

接種開始年齢	回 数		接種間隔
生後2か月から 7か月に至るまで	初回免疫	3回	1歳に至るまでの間に、27日以上の間隔をおいて接種
	追加免疫	1回	初回3回終了後、7か月以上(標準的には13か月まで)の間隔をおいて接種
生後7か月から 1歳に至るまで	初回免疫	2回	1歳に至るまでの間に、27日以上の間隔をおいて接種
	追加免疫	1回	初回2回終了後、7か月以上(標準的には13か月まで)の間隔をおいて接種
1歳から5歳に至るまで	1回		

- ※ 接種間隔がまもられていない場合、予防接種健康被害救済制度の給付対象になりませんので、ご注意ください。
- ※ 接種の見合わせ、供給量の不足などやむを得ない事情により、上表の接種間隔から遅れた場合は、接種を受けることができるようになった時点で、速やかに接種を受けてください。

(裏面もご覧ください)

4. 予防接種不適当者(次の方は接種を受けないでください。)

- (1)明らかに発熱している方(通常は37.5℃を超える場合)
- (2)重い急性疾患にかかっていることが明らかな方
- (3)このワクチンの成分または破傷風トキソイドによってアナフィラキシー(通常接種を受けた後、30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと)をおこしたことが明らかな方
- (4)その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいと判断された方

5. 予防接種要注意者(次の方は接種を受ける前に、医師にご相談ください。)

- (1)心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- (2)過去に予防接種を受けた後、2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状のみられた方
- (3)過去にけいれん(ひきつけ)をおこしたことがある方
- (4)過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方もしくは先天性免疫不全症と診断された近親者がいる方
- (5)このワクチンの成分または破傷風トキソイドに対してアレルギーをおこすおそれのある方

6. 予防接種を受けた後の注意・副反応(接種を受けた後は以下の点に注意してください。)

- (1)予防接種を受けた後しばらく(30分間程度)は、ショックやアナフィラキシーがおこることがありますので、接種した医師とすぐ連絡が取れるようにしておきましょう。
- (2)接種を受けた後24時間は、高熱やけいれんなどの副反応がおこる可能性があります。出現した場合は、速やかに接種した医師の診察を受けてください。
- (3)接種部位は清潔に保ちましょう。発熱などもなく、体調がよければ、接種日当日の入浴は問題ありませんが、接種部位をこすることはやめましょう。
- (4)接種日当日は激しい運動はさけてください。その他はいつもどおりの生活で結構です。
- (5)このワクチンの接種を受けた後、違う種類のワクチンの接種を受ける場合には、1週間以上の間隔をおく必要があります。
- (6)Hibワクチンの接種を受けた後に、他のワクチンを接種した場合でもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なもので数日で消失します。最も多くみられるのは接種部位の発赤(赤み)や腫脹(はれ)です。また発熱が接種された人の数%におこります。重い副反応として、非常にまれですが、海外で①ショック・アナフィラキシー様症状(じんましん・呼吸困難など)、②けいれん(熱性けいれん含む)、③血小板減少性紫斑病が副反応として報告されています。
接種を受けた後1週間は体調に注意しましょう。また、接種を受けた後、腫れが目立つときや機嫌が悪くなったときなどは、接種した医師にご相談ください。

7. 予防接種健康被害救済制度

重い副反応がおこる可能性はきわめて低いですが、皆様が安心して予防接種が受けられるように、予防接種法では健康被害救済制度が設けられています。

万が一、重い副反応がおこった場合、厚生労働大臣が、その副反応が予防接種法に基づく定期予防接種を受けたことによるものであると認定したときは、法に基づく健康被害救済対象となります。